

Combdia



IVY 支援地域
スバイリエン州

JICA 草の根技術協力事業（草の根パートナー型）*

IVY がカンボジアで行う 農村の貧困削減のための取り組み

草の根獣医、家畜普及員養成プロジェクト
持続可能な農業を通じた女性による農村開発プロジェクト
女性による野菜共同生産・出荷を通じた農村振興プロジェクト
野菜供給・流通システムの構築プロジェクト

* 草の根技術協力事業（草の根パートナー型）

草の根技術協力事業は、JICA（独立行政法人国際協力機構）が日本の NGO などと互いに経験とノウハウを活かしながら開発途上国の社会開発等に寄与することをめざして、平成 11 年に開始された事業です。



日本からの支援で、スバイリエンはどのように変わったのでしょうか？



「貧しいカンボジアの中でも特に貧しい」

ホームレス多発の最貧困地帯として知られるスバイリエン州は、カンボジアの東南端、ベトナム側にツノのように突き出た地域です。

ここでIVYが活動を始めたのは、1999年のこと。農村から首都プノンペンに流れてくる農民が急増、特に小さな子どもを抱えた女性が多くいました。

「農民のホームレス化を村で食い止めたい」
そんな思いからスバイリエンでの支援を開始しました。
しかし、そこには想像以上に厳しい貧困の現実がありました。



首領ののり山に流れる農民

やせた土地

出稼のシクロの運転手

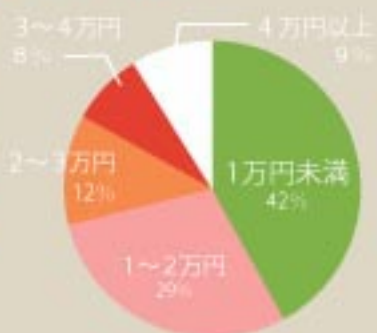
農業団の母子家庭の家

村に疎された女性と子ども

物乞いの母子

年収が1万円にも満たない。

プレイチャンボック村は113世帯、チューティール地区の中では比較的恵まれた方だが、現金収入が1万円未満の世帯が48世帯。1日当たりわずか27円、米1キロ分しかない。
*1リエル = 0.25円で換算



[1世帯当たりの年収]

10年前のスバイリエン州

Before

米の収穫量は、山形県のわずか7分の1。
次の収穫前に食べる米もなくなってしまっていた。

耕作面積は平均で1.3ha。42%が米から収入を得ている一方で、半年で米がなくなる世帯も半数に上っていた。



食費だけでなく、薬代や化学肥料が家計を圧迫。

農民だが、米や野菜が不足し、よそから買っていた。栄養不足で病気にかかりやすく、薬代が家計を圧迫していた。

[支出の内訳]



しかし、村には収入を増やす手段がない。

農業が収入につながっているのは家畜飼育(32世帯)。野菜は5世帯。安い輸入野菜が市場の7割を独占。作っても割に合わなかった。

[なぜ野菜を作らないのか]



ふくらむ借金・借米。借りた米は倍返し。返済が滞って、田んぼを手放すケースも。

カンボジアの借金の利息は高く、月30%が一般的である。米は精米業者から借りると、収穫後に倍にして返さなくてはならない。そのため借金借米が雪だるま式にふくらんでいく世帯が半数以上だった。

[借金]



[借米]



10年後(現在)のスパイリエン州

After

貧しい人の借金が減るなど、 貧困の削減に効果が出始めています。



年1回開かれる女性組合の総会のようなNPOの総会と同じで、1時間でどんな活動が行われたかという成果を得たか共有。また、会計もちゃんと公表することで組合員の信頼を得ている。

地域の役職についた女性の数

10年前	・・・ 0人
現在	・・・ 地区評議会委員 1人
	・・・ 副村長 9人

村人からの信頼が厚い組織 = 女性組合 中心メンバーは地域の行政の役職に進出

Before 男性のほとんどが稼げに行き、村には女性ばかりが残されていた。が、密告を奨励したポルボト時代の後遺症で、隣りの家とも没交渉。困ったことがあっても助けあうことはほとんどなく、みんなが孤立していた。

After IVYは農村を回って、女性を集め、説明会やワークショップを重ね、賛同を得て、女性組合を設立していった。また、役員も立候補してもらい、みんなの選挙で選んだ。また、役員になった人には、みんなに信頼してもらうには、ボトムアップの組織であることの重要性を説いた。さらに、規約を作り、明朗な会計、意思決定の仕組みなども整備した。おかげで10年後の今、女性組合は従来あった村のどの組織よりも村人から信頼されている。



[米の借入先]



[借米]



いざという時、貸してもらえる 村のセーフティネット = 米銀行 貧しい人の借金が減った!

「米銀行」は、まず収穫直後の米の値段が安いときに資本金で米を購入。女性組合の役員の自宅の庭の一角等を借りて、米蔵を建て、そこに保存し、村人の食べる米が不足する頃あいを見計らって、希望者の人数で均等に頭割りして貸し出し、収穫後に利息(米)をつけて返済する。

この「米銀行」がIVYの活動対象村20村すべてに導入されている。10年前に比べ、米を借りている人は40%から9%まで減った。借入先も米銀行や親戚など低利のところとなっている。借金も60%から15%まで減った。「借金が減ったのは米銀行のおかげ」とほとんどの村長が評価しており、この厚い信頼が返済率の高さにつながっている。

* IVY 基礎調査 2007

10年前、IVYだけでたった1村から始まった援助でしたが、2002年からJICAとの連携が始まって、今ではスパイリエン州内の5地区にまで範囲を広げています。また、地元行政との連携も促進され、野菜の売り込みをいっしょに行うまでになっています。





地区の市場とはいえ、「新入り」は簡単にに入れてもらえないが、IVYの口利きで売り場が持てた。

無農薬野菜をブランド化 女性組合の生産者グループが 売り場を確保できた

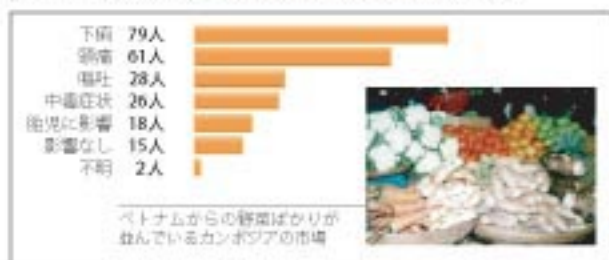


Before カンボジアの野菜市場は、値段の安さと整備された供給システムを持つベトナムからの輸入野菜が市場の7割を独占。また、コネのない村の女性が市場の販売権を手に入れるのは難しかった。仲買人に売るしかなかったが、見栄えの良い出荷方法もわからなかったので値段も安く、利益にはつながらなかった。

After 値段が安く、種類も豊富なベトナム産だが、残留農薬等が近年問題となっている。IVYが行った調査では「健康被害」を経験したという消費者が半数以上いた。そこで、安全な野菜を供給すればきっと売れる!と確信したスタッフは、「栽培ガイドライン」を作り、無農薬栽培を指導。地元のお医者さんがPRに協力してくれて、まず村の中で売れ始めた。今まで相手にしてもらえなかった市場も、市場の一角に販売場所を確保することができるようになった。

びっくり! データ ベトナム野菜の健康被害

1. クラウコー村農産物消費 101人への聞き取り 『2008年3月 IVY調べ』



ホテルからは週1回大量注文が入るが、まだ作れない野菜も多いし、量も不足している。野菜は米、肉もほしいと言われていたが...

26の生産者グループを組織化 =生産者協会の設立

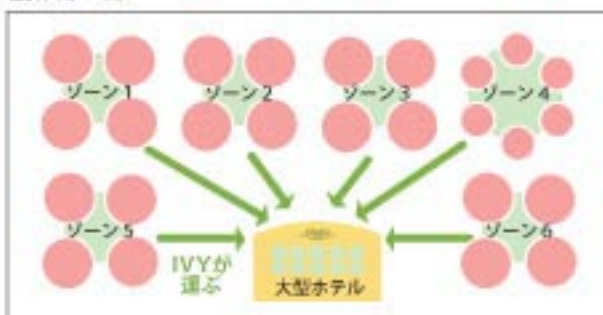
毎週400キロの野菜をホテルへ出荷できるまでに

2008年12月、スバイリエン州農業局の尽力により、ベトナムとの国境沿いにある大型ホテルへの売り込みに成功。近所に売っていたときと違い、一度に毎週たくさんの量を売ることができるようになったことが、生産者の意識を「ビジネス」へと変える転機となった。

20村26グループ400世帯の生産農家を6つのゾーンに編成。毎週水曜日にIVYに注文が入ると、各ゾーンのリーダーに携帯電話で連絡。リーダーは各グループの販売人に連絡。早ければその日の午後から夜にかけて、遅くとも翌朝には集荷所に野菜が届き、IVYの運搬車が村から中継地点となっている農業局の倉庫へ。ここでホテルのトラックに納品するという流れができた。

2~4つの村をまわって、400キロの野菜を集めるには容易でないが、協会代表のサリーさんは、「大量の野菜を集めたり、集荷所まで持ってくるのはとてもたいへんだけれど、いい収入になるので幸せなことだわ」と話している。

農作物の流れ



10年先の未来

- ・生産者協会がIVYから自立
- ・野菜のよる世帯収入が年3万円以上に増加
- ・野菜20品種、1トンが毎日供給できる体制が整っている

野菜出荷組合に600世帯以上の生産農家が確保されている
新しい生産者が常に育成されている

生産者が組合のガイドラインに沿って栽培している
生産者の半数以上が有機農産物の認証を受けている

組合によって生産・販売計画が立てられている
注文に応じた出荷量・品目を供給できている

組合で売り込み、商談ができ、新たな取引先を開拓できている
大口の顧客(生協・ホテル・量販店等)を複数獲得している

これらのことが
IVYなしでできるようになっている

しかし、生産と村での集荷以外、運搬から取引先との交渉やお金のやりとりなど、ほとんどの部分をIVYが手伝っている現状です。

そこで、新たな一歩として2010年1月から「農産物の供給・流通システムの構築プロジェクト」がスタートします。



首都のスーパーで研修

村ではこんな野菜が収穫できるようになりました！！



周辺国にのまれないカンボジアの農業を目指して

松浦 あゆみ
IVYカンボジア現地代表
プロジェクトマネージャー



なぜカンボジア支援なのか、と自分に問うときがあります。

カンボジアはポルポト政権下で約4年間に100万人もの国民を失いましたが、その間ポルポト政権は国際社会から正式な国家として承認され続けていました。当時、ほとんどの人々が真実を知らなかったとはいえ、「何もしなかったことをなんらかの形で償いたい」個人的な気持ちに過ぎませんが、厳しい時代を生き抜いてきた村の人たちと接する中で、そう感じるようになりました。

カンボジアの農村は脆弱です。ポルポト政権下で農村コミュニティは崩壊し、政府の政策もないに等しいまま原始的な農業が行われ、隣国に10年も20年も遅れをとってしまったのです。農業国でありながら、カンボジアは米を除いた多

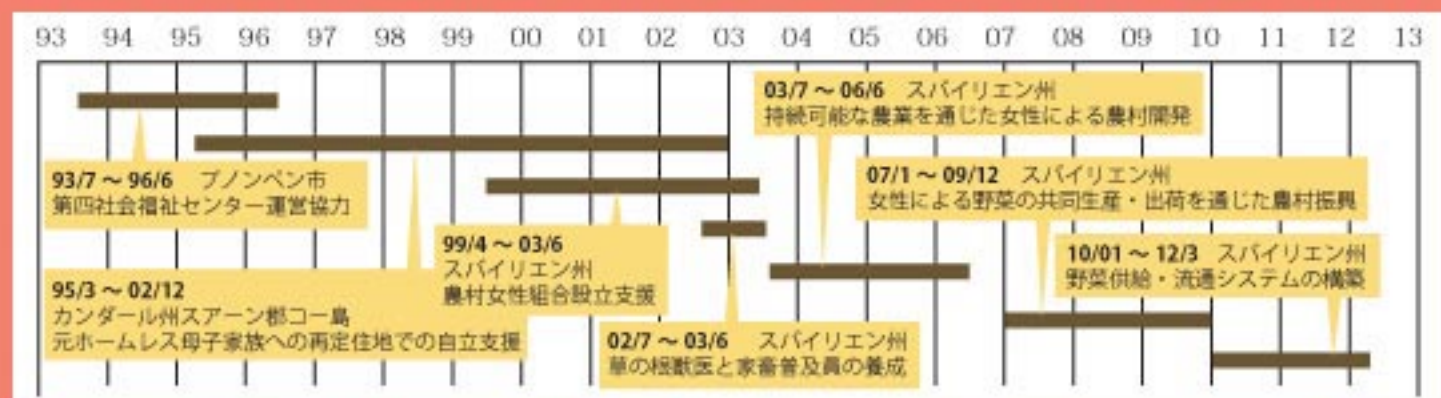
くの農産物の輸入国となってしまいました。

しかし、最近では「カンボジアの資源は農業だ、国の発展は農業にかかっている」と盛んに言われるようになりました。カンボジアの人口の80%以上は農村に住み、70%は農業に従事しています。カンボジアがこのまま隣国に食われていくのか、農業を主体に立ち上がっていくのか、それは農村の発展にかかっているといえます。

IVYは2009年、地方農業局と組んでスバイリエン州で初めて、これまで全ての農産物をベトナムから仕入れていた国境付近のホテルに、野菜の大量出荷を始めました。農家が出荷のために組織化されたことは、全国的にも先駆的な事例として注目されました。

この事業によって、IVYの支援する村の農民が少しずつ野菜栽培の可能性に気づき始めました。自家消費用だった家庭菜園で、販売のための野菜を熱心に栽培するようになってきました。カンボジアの農村社会が強化されれば、カンボジアもいつか私たちの支援が必要ないくらい強くなっていく。農家の人たちの目が日々きらきらしていくのを見てると、そう信じる気持ちが起こってくるのです。

IVYは、1970年からの27年に及ぶ内戦が終わり、復興への歩みを開始したカンボジアで、住民の自助努力による貧困削減をめざし、1993年から16年にわたって、7つのプロジェクトを行ってきました。このうち、4つがJICA草の根技術協力事業となっています。



各プロジェクトについて、さらに詳しくお知りになりたい方は、IVYのホームページからダウンロードしてください。各事業計画書、中間評価報告書、最終評価報告書などがご覧になります。

IVY 山形

検索



インドシナ半島の中央に位置するカンボジアは、タイ、ベトナム、ラオスと隣接しており、大河メコンと東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖の自然の恵みに支えられています。アンコール・ワットを始めとした、かつてインドシナ半島を支配したアンコール王朝の栄華をしのぼせる数々の貴重な遺跡群は世界遺産としても知られており、それを一目見ようとカンボジアへ足を運ぶ人々が年々増えています。1953年、カンボジアはフランス統治の時代を経て独立したものの、隣国で起きていたベトナム戦争やクーデター、内戦などに見舞われ、なかなか国内の情勢は整いませんでした。さらに、1975年にはポル・ポト政権が成立し、内戦が激化。1992年、国連が紛争の解決に乗り出し、1993年に新生カンボジア王国が誕生。1997年の内戦終結以降、復興へと歩みを進めています。

人口：約1,340万人（08年政府統計）
 民族構成：クメール人…90% ベトナム人…5%
 華人（華僑）…1% その他の民族…20%
 言語：クメール語 首都：プノンペン（人口：約100万人）
 面積：18万1,040平方キロ（日本の約半分）
 通貨：リエル(Riel) 1US\$ = 4000リエル 100リエル = 2.5円
 宗教：上座部仏教90%、イスラム教、キリスト教、民間信仰
 気候：熱帯モンスーン気候（雨季5月～10月、乾季11月～4月）
 時差：2時間（日本の方が早い） 平均寿命：（1979年）31歳
 乳児（0歳児）死亡率：123人（1000人当たり）
 GNP：710米ドル（2008年カンボジア政府資料）
 主な産業：観光・サービス（41.8%）、農業（34.4%）、
 鉱工業（23.8%）（2008年カンボジア政府資料）
 農業人口：68.5%（2004年FAO資料）
 農業のGDPに占める割合：34.3%（2008年カンボジア政府資料）

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) とは？

Japan International Cooperation Agency

開発途上国の社会・経済の開発支援をするため、政府をはじめ、国際機関、NGO、民間企業などさまざまな組織や団体が経済協力を行っています。これらの経済協力のうち、日本政府が開発途上国に行う資金や技術の協力を政府開発援助 (ODA: official Development Assistance) といいます。JICA

は、技術協力の実施機関として前身である国際協力事業団の設立以来、開発途上国が社会・経済面において、自立・持続的に発展できるよう、制度構築、組織強化・人材育成を目標に協力活動を実施しています。また、自治体、NGO、大学や市民の方々の国際協力への参加・取り組みの支援を行っています。

■ 協力 独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 東北支部

〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1
 仙台第一生命タワービル15階
 TEL: 022-223-5151 (代表) FAX: 022-227-3090

【現地連絡先】独立行政法人 国際協力機構 (JICA) カンボジア事務所

6th, 7th, 8th Floors, Building #61-64, Preah Norodom Blvd,
 Phnom Penh, CAMBODIA
 TEL: (855-23) 211673 FAX: (855-23) 211675

認定NPO法人 International Volunteer Center of YAMAGATA 国際ボランティアセンター山形 (IVY) とは？

IVY (アイビー) は、1991年に山形で設立された国際NGOです。1980年代、内戦により困窮したカンボジア。スタディツアーで難民キャンプを訪れたメンバーは、地方発で「地球の課題」「地域の課題」に取り組もうと、団体を立ち上げました。

カンボジアでの農村支援、身近に暮らす在住外国人の支援、子どもたちへの国際理解教育など、地域でも世界でも、よりよい世界をつくっていく活動を行っています。

■ 発行 認定NPO法人 国際ボランティアセンター山形 (IVY)

〒990-2432 山形市長徳町1-17-40
 TEL: 023-634-9830 FAX: 023-634-9884
 E-mail: LER04525@nifty.com URL: http://www.ivyivy.org/

- 1991年 JVC山形として発足
在任外国人への相談、日本語教育支援を開始
- 1993年 カンボジアへの支援を開始
- 1995年 フィリピンへの医療支援を開始(～00)
- 1997年 国際理解教育を開始
- 1999年 IVY (国際ボランティアセンター山形) にも名称変更
NPO法人の認定を取得
- 2000年 車ディモールへの医療支援を開始(～02)
- 2002年 カンボジア支援でJICAとの協力を開始
外務省よりNGO相談員(東北ブロック)受託
環境教育を開始
- 2005年 環境教育を開始
- 2008年 国税庁の認定NPO法人資格を取得

【現地連絡先】カンボジア事務所

Mepleung Village, Sway Rieng commune,
 Sway Rieng district, Sway Rieng Province, Cambodia
 TEL: (855-44) 945966 E-mail: ivyonline.com.kh